

## シュトレーメル伯爵家

「原因は何かしらね？」

またあなたたちなの——フラウ・ロートリンゲンが、そんなありふれたフレーズで彼らに説教をくれるわけもなく、その温顔から叱声が飛ぶこともない。にも関わらず、この老貴婦人の前に呼び出されると、ラインハルトですら自ずと背を正してしまうことがあった。

かつては金髪であったのに違いない、見事な銀髪を古風な形に結い上げたフラウ・ロートリンゲンは、ゆったりと座した姿勢のまま、彼女の前に呼び出された悪童たちに視線を据えている。マリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン。幼年学校一年生たちの数学担当教官が戦死してしまつたがために、臨時に彼らを担当することになつたのだが、既にその威令は一年生クラス全体に行き届いていると言つていい。

「こいつが、いきなり殴りつけてきたんだ！」

顔の中央にちままと集まつた、その口が歯を剥き出して、金髪的美貌の少年に対する言葉の形をした憎悪を吐き散らした。

「帝国騎士のくせに、この俺を殴つたんだぞ。俺の伯父上はヴァインSTEINゲン侯爵閣下で、俺の母上はヴァルテンブルグ伯爵の姪なんだぞ！」

粗暴さを絵に描いて額縁をつけたような、とは余りにステレ

オ・タイプな形容かも知れない。一〇歳という年齢に比して長身のラインハルトやキルヒアイスと較べても、確実に一回りは大きな身体の輪郭は、しかし、引き締まつた筋肉ではなくてだぶついた贅肉で縁取られている。大きすぎる顔の輪郭から遠く離れすぎ、奥に引つ込みすぎた目鼻の造作が、ある種の類人猿の醜悪な戯画を連想させる。

フラウ・ロートリンゲンは、あるいは微かのため息をついたかも知れなかつた。それとも臨時の数学教師でしかない自分が、どうしてこのクラスの生活指導をしなければならぬのか、納得できていないのかも知れない。

もつとも、それはまだ一〇歳の少年であるキルヒアイスの観察に過ぎなかつた。実際にはこの老貴婦人が、現在の事態に興味津々に視線を注いでいるのだとは思つても見なかつたのだ。

「もう少し、語彙を増やした方が良いわね。ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿。自分の名前も名乗れないのでは、この先が思いやられます」「なにを——！」

フラウ・ロートリンゲンのいわゆる『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』は、怒りに顔面を真っ赤にするが、凶暴な色合いを帯びた目は、この老婦人を直視しようとはしない。フラウ・ロートリンゲンに正面から反抗すること一〇回近く、ようやく、彼女への反抗が無駄であるばかりか、自身にとつてもデメリットしか生まないことを察したらしかつた。

「猿や犬でも一度怪我をしたら、二度としないように注意するものなのにな。あいつらの知能は、ミミズ並みだな」

辛辣に言い捨てたのはラインハルトである。積極的に同意の言葉を漏らすことはなかったが、キルヒアイスも意見を異にすることはなかった。

「まだわたしの質問に答えていないわね。原因は何なのかしらね」  
フラウ・ロートリンゲンの青い目が、一步下がって佇んでいた少年に向けた。

「コンラディンが——」

少年が指したのは、『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』だった。少女のように肩口で綺麗に切り揃えた髪は、帝国貴族には珍しいストレートの黒髪であり、その瞳もほとんど純粹な漆黒。白哲の肌とのコントラストが鮮やかだった。ラインハルトの傍にいと完全に霞んで見えるとはいえ、美少年の形容が些かも不自然ではない端正な少年である。

「ヘル・ミューゼルの親について悪口を言ったんです。それから、姉君のグリューネワルト伯爵夫人についても」

言葉遣いの幼さは年相応として、口調の冷静さ、平坦さにキルヒアイスはそつとラインハルトの表情を伺った。蒼氷色の目が軽く睨られ、微かにその視線が後ろへ流れるのが見えた。ラインハルトもまた、この同級生に興味を惹かれたことは明らかだった。

「グリューネワルト伯爵夫人のね？」

「はい。コンラディンはヘル・ミューゼルの父親のことを……」

「内容は話さなくてもよろしい、ヘル・シュトレーメル」

軽く手を挙げて、フラウ・ロートリンゲンは黒髪の少年を遮った。

「父親を罵られて、ヘル・ミューゼルはどうしたのかしら？」

「だから、いきなり殴ってきたんだ。俺は本当のことしか言っていない。本当のことを言われて他人を殴るのは、こいつが下賤の……」  
『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』……コンラディン少年の罵声が、スイッチを切られたように止まる。フラウ・ロートリンゲンが執務机の上の大きな鈴、牧場で牛たちを呼び集めるための銅製の鈴だから、相応に大きい。

信じられないことに、この細身の老婦人は、平気でこの大きくて重い鈴で生徒たちを殴るのだ。無論、犠牲者は、聞き分けのない、我が儘限りを尽くしている大貴族の子弟たちに限定されていたが。そして、コンラディン少年は、この鈴を頭上で受け止めた回数ではクラスのとつぷを疾走している。

その痛みの記憶と、その後で浴びせられる彼の両親と、時にヴィンステインゲン侯自身からの叱責が、さしもコンラディン少年をも自己防衛の姿勢に走らせた。つまり、両手で頭を抱えたのである。が、彼の期待(?)に反して、フラウ・ロートリンゲンは鈴を鳴らして、従卒を呼び、紅茶のお代わりを頼んだだけだった。

「それで、ヘル・シュトレーメル？」

「ミューゼルが相手をしようとしないので、コンラディンは席まで言って、こんどはグリューネワルト伯爵夫人のことをあれこれ言い始めました。席が離れたので、グリューネワルト伯爵夫人の名前が聞こえただけで、あとは聞こえませんでした。ヘル・ミューゼルがコンラディンを殴ったのは、その後でした」

コンラディンもすぐに殴り返そうとしたが、その拳がラインハルトを捉えることはなかった。コンラディンは仲間の加勢を呼びかけ、その声に応じた数名が、今彼らと共にフラウ・ロートリンゲン

の執務室に立たされているわけである。

キルヒアイスの役割はラインハルトへ加勢して彼らを叩きのめすことではなく、彼らの間に割って入っていざこざを止めることだった。一対一でラインハルトがコンラディンのような少年に負ける気遣いはなかったし、一対多となってもラインハルトがむざむざやられているわけではない。ただ、何しろ先に手を出したのはラインハルトである。騒ぎの責任を問われて停学や退学などになっては大変なことになる。

危うく大乱闘になりかけている彼らの中に飛び込み、自身も何発か食らいながらも、漸く彼らを引き離れたところに、フラウ・ロートリンゲンが現れたのだ。彼女の授業が始まる前の休憩時間でのトラブルだったのだから、これは別に偶然でも何でもない。現れたのが他の教官であったとしても、多分、彼らはフラウ・ロートリンゲンの執務室への出頭を命じられることになっただろう。何しろ、彼女は臨時に一年生クラスの生活指導を担当することになっていたのだから。

「ほら見る、やつぱりミュゼルが先に手を出したんじゃないか。俺は悪くないぞ。先に暴力をふつてきたこいつが悪いんだ」

我が意を得たりとコンラディンが吠え猛るのに、フラウ・ロートリンゲンは微笑して首を振った。

「『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』、暴力は『ふるう』ものであって『ふる』ものではありませんよ」

やんわりと、コンラディン少年の語彙不足をたしなめてその口をふさぐと、老貴婦人は黒髪の少年に視線を戻す。

「わかりました。ヘル・シュトレメメル。あと一つ聞きます。今、グリューネワルト伯爵夫人、と呼びましたね。ヘル・ヴィステインゲンは、伯爵夫人をその名で呼びましたか？」

ぎよつとしたようにコンラディンが目を瞠る。勝利を確信していたに違いない、その顔面から音を立てるようにして血の気が引いていく。一瞬に白茶けた顔色に変わった額にどっと脂汗が浮かぶのが見えた。それでも深く引き込んだ目が、ぎらつくようなねつい色を帯びて、まずラインハルトをにらみ据え、それから黒髪の少年、シュトレメメルに視線を突き刺し始める。

シュトレメメル少年も気づいたらしい。わずかにその黒瞳が動くのが、キルヒアイスからもはつきり見えた。

「おい、シュトレメメル！」

シュトレメメルは、しかし、コンラディンの怒声を無視した。はつきりとした動作で首を左右に振ったのだ。癖のないストレートの黒髪がさらさらと左右に流れるように揺れた。

「いいえ、コンラディンは伯爵夫人をその名ではお呼びしませんでした」

「黙れ、シュトレメメル、どうなるかわかってんだろうな！」

「お静まりなさい、『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』——ヘル・シュトレメメル、それで宜しい。ヘル・ミュゼル、それからヘル・ヴィステインゲン……」

居住まいを正し、フラウ・ロートリンゲンは居並んだ悪童たちを正面からその視界に入れ直した。

「例によって、レポートの提出を命じます。期限と枚数は分かっていますね」

俺は被害者だぞ……なおも抗弁しようとするコンラディンを抑えるように、フラウ・ロートリンゲンはラインハルトに向かって言葉を継いだ。

「ヘル・ミューゼルは夕食抜きです」

「はい——」

「手出しをした以上、何らかの懲罰は覚悟の上だったはずですよ。あなたにはあなたの正義があるのかも知れませんが、事情はどうあれ先に手出しをしたのはあなたです。宜しいですね？」

一瞬、蒼氷色の瞳が瞬いたように見えたのは、あるいは自分自身を納得させるための時間を要したからなのだろうか。ラインハルトは頷いた。

「分かりました、フラウ・ロートリンゲン」

「助かったな——」

明日の朝の始業前……フラウ・ロートリンゲンの『レポート』は期限が厳しい。期限を守れなかったり、一〇〇〇語以内、レポート用紙一枚という枚数が規定のそれに届かなかつたり、多すぎたりすると、そのまま生活態度の評点にマイナスが付く。一〇歳の少年にとっては中々の難行である。

それに時間の制約もある。普通に幼年学校のクラスを受けているだけなら、それなりの自由時間は確保できるのだが、ラインハルトにとって幼年学校は士官学校への一階梯ではない。幼年学校卒業と同時に最前線に身を投じる決意でいる彼にとって、幼年学校はで

きるだけ短期間にできるだけ多くのことを学び取る唯一の機会である。ゆえに、限度ぎりぎりまで受講クラスを増やしている上に、課外授業でさまざまな実技講習までうけているのだ。

消灯時間まであと幾らもない時間帯、ラインハルトは黒パンを嚙りながら、レポートの仕上げにかかっている。黒パンは無論、キルヒアイスが食堂からこっそりとくすねてきてくれたものだ。

「そうだね。ヘル・シュトレーメルが本当のことを言ってくれてなければ、夕食抜きでは済まなかつたと思うな」

一方のキルヒアイスも、明日のクラスの予習に余念がない。彼とて並以上の頭脳と、こちらは天与ともいうべき身体能力の所有者であることは間違いない。その彼にとってさえ、この金髪の友人と肩を並べて行くのは大変なことに違いないのだ。

「ヘル・シュトレーメルってどんな奴なんだ。知ってるか、キルヒアイス？」

「ええと……」

テキストから目を上げて、キルヒアイスは記憶をたどる。飛び抜けた美貌にも関わらず、性格に圭角の多すぎるラインハルトには友人が多くない。金髪の天使のようなこの少年と近づきになりたがっている同級生が、実は結構多いことをキルヒアイスは知っているが、残念ながらラインハルトの狷介さが彼らを容易には近づけないのだ。

代わりに……と言うべきなのだろう、キルヒアイスに接近してくる同級生や同期生は多い。男爵家出身のフェルディナンド・フォン・トゥルナイゼンを初めとして、下級から中級の貴族の出身者が中心で、キルヒアイスと同じ平民出身者も何人か含まれている。当

然のことながら伯爵家以上の上級貴族の過半はラインハルトを敵視している。

意外なのは、平民出身者の中でも成績上位者たちで、彼らはラインハルトを反門閥貴族のシンボルとしては見ていない。帝国騎士という、貴族の中でも最下層の出自よりも、美しすぎる容姿が典型的な貴族を連想させるためなのかも知れなかった。

自分自身、ラインハルトとアンネローゼの姿を間近で見るとは、ヘル・セバステイアン・フォン・ミューゼルが貴族だとは信じなかったからな——そう思うキルヒアイスの思いは、まだ一〇歳の少年の制約を離れてはいなかった。

「ホントのところ、よく知らないんだ」

キルヒアイスは正直なところを口にする。ヘル・シュトレーム……フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレームは、そんな中で異質な存在だった。

伯爵家であるシュトレーム家の長男だというフロリアン・ゲールハルトが、ラインハルトやキルヒアイスを彼らの社会への闖入者として敵意の眼差しで出迎えたとしても何の不思議もない。むしろ当然の態度だと言って良い。

「話しかけると普通に話してくれるし、何か頼んでも引き受けてくれるんだ」

キルヒアイスにとっては別に珍しくもない、『普通の級友』である。特段に親しい友人というわけではなく、教室に出れば挨拶し、冗談も交わすし、会話やディスカッションで口論になることもない。とは言え、家族のことや個人的な打ち明け話をするほどには親しくもない。

「だけど、あの『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』——」

ラインハルトはフラウ・ロートリンゲンの口調をまねた。

「あいつの取り巻きつてわけでもないだろ」

「違うよ。なんて言うか、対等……って言うのか、友だちつてわけでもないし、脅されても平気そうだし」

ヴィンステンゲン侯爵やヴァルテンブルグ伯爵と言えば門閥貴族の中でも相当以上の有力者だ。その親族の名をあげて、脅されれば大抵の少年は口をつぐむ。たとえば、今日、コンラディン少年が口にした許されざるあの言葉にしても。

挑発に乗らないラインハルトに苛立ったのだろう、コンラディンはアンネローゼを指してこう言ったのだ。『皇帝陛下に（一〇歳の少年にのみ使用可能な、女性の身体のある部分を指す低劣な俗語）でお仕えしている、お前の姉貴のあの売女』。ラインハルトが一瞬のうちに激昂の頂点に達したとしても何の不思議もない。キルヒアイスにしてみれば、ラインハルトがコンラディンの頬に一発入れただけで済ませてやった寛大さが不満なほどなのだ。

一方、仮にも現皇帝の寵姫をあんな言葉で罵ったとなれば、それが子供の戯れ言でもただでは済まない。もし、フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレームが、その言葉を正確に伝えていれば、フラウ・ロートリンゲンはコンラディンを不敬の罪に問わなければならなくなる。だから、彼女はフロリアン・ゲールハルトの言葉を途中でどめたのだ。

「ひよっとしたら、フラウは全部聞いてたのかも知れないね」

キルヒアイスの言葉に大きく同意を示して頷くと、ラインハル

トはキーを押してレポートのハード・コピーを出力させた。もう一度校正読みをするつもりらしかった。このあたり、キルヒアイスの金髪の友人は意外なほどに犀利だった。

「ああ。だから、シュトレーマルにしゃべらせなかつたんだ」

「——？」

「考えてみるよ、ヴィンステインゲン侯やヴァルテンブルグ伯だろ。その甥だか、姪孫だか知らないけど、そんな奴を罰したら大変じゃないか。フラウだつて、面倒は避けたい。そうなんじゃないのか？」

キルヒアイスは答えなかつた。予習のテキストの最後の「ペー」を閉じると、椅子を回してラインハルトを正面から見据える。ラインハルトの白哲がみるみる首筋から赤くなり、やがて参ったように右手で口許からうなじのあたりをなで回した。ちよつと拗ねたように、友人の赤毛から視線を背けた。

「——言つてみただけだ、キルヒアイス。言つてみただけだぞ」

実のところ分かっている。ラインハルトは単に不満だったのだ。姉をあのような言葉で貶め、侮辱したコンラディンのような存在が、処罰もされずに……レポートは書かされてはいるものの、のうのうとのさばっている。その事実にはラインハルトは耐えられないのだ。しかも、コンラディンの口にした言葉は、それがあの少年の品性と内面を反映した下劣さに満ちていようと、それが事実の一端を示していることに間違いはなく、かつ、彼の熱愛する姉をそうした境遇に突き落としたのが、他ならぬ実の父であるという経緯がある。にも関わらず、自分は未だ一〇歳でしかなくて、現実をどうすることもできない。五年後、一〇年後はどうあれ、現時点においては、どれほどに耐え難くあつても事実が事実として自分たちの前に

立ちふさがっている。そうした苛立ちと怒りが内心で複雑に反射し合い、共鳴しあつた結果としてフラウ・ロートリンゲンへの不満という形で言葉となつて吹き出してきた。

もちろん、この時のキルヒアイスにそこまでの自己分析ができていたわけではない。ただ、彼自身のフラウ・ロートリンゲンへの評価と、ラインハルトの性格への知識、それらがラインハルトの言葉への違和感となつて現れてきた。それが顔に表れて友人を凝視させたに過ぎない。

「調べてみるよ、ヘル・シュトレーマルのこと」

キルヒアイスは話題を戻した。シュトレーマル……フロリアン・ゲールハルトに、これまで二人は注意を払つたことがなかつた。彼が敵意も好意も示さなかつたことと、本人自身が余り目立たなかつたことも、彼らの注意を惹かなかつたのだ。とは言え、とにかく敵の多いラインハルトにとつては一人でも味方は多い方がよいに違いないし、ラインハルトに味方を作るのもまたキルヒアイスにとつて大事な義務であり、権利だった。

フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレーマルはシュトレーマル伯爵家の長男であり、ラインハルトに次ぐ優等生グループ……キルヒアイス、トゥルナイゼンほか数名……の一員だった。キルヒアイスに、シュトレーマル家に関する情報を提供したのは、トゥルナイゼンだった。シュトレーマル伯爵家の状況は貴族社会では広く知られており、決して上級貴族ではないトゥルナイゼン

でも一通りのことは耳に入っていたのだと言う。

三〇年ほど前までは、シュトレーメル伯爵家は、その名を冠した星系とその周辺地域の商用航路からの巨大な収益を背景に、帝室や公爵、侯爵クラスの間閥貴族とも婚姻を重ね、帝国でも屈指の有力貴族として知られていた。

そのシュトレーメル伯爵家が斜陽の道へ踏み込むことになったきっかけは、クロプシュトゥック侯爵とまったく同じだった。現皇帝フリードリヒ四世の即位である。クロプシュトゥック侯がフリードリヒ四世の弟クレメンツを支持していたのに対して、シュトレーメル伯爵は当時の皇太子リヒャルトの忠実な側近として知られていた点、わずかに立場を異にしているとも言えるだろう。

史実の語るとおり、リヒャルト皇太子はクレメンツの策謀で皇帝暗殺未遂の冤罪を着せられて処刑され、その側近六〇名もまた連座して毒杯を仰ぐことになった。当時のシュトレーメル侯爵家当主もまた、無実を叫ぶその口に毒酒を注ぎ込まれた一人となった。侯爵位を初めとする一切の名譽、地位、財産は剥奪。わずかに生き残った一族は辺境惑星への流罪に処された。

「ちよつと待て、キルヒアイス」

そこまで聞いたとき、ラインハルトは眉をひそめてキルヒアイスを遮った。

「リヒャルト皇太子の皇帝弑逆未遂は無実の罪だった……んじやないのか？」

「そう、クレメンツ大公の陰謀だった。そのことが三年くらいしてから分かって、今度はクレメンツ大公が死刑になった」

「じゃあ、シュトレーメル伯爵……というか、侯爵も無罪だと分

かったはずだろ？」

「それで、生き残っていた誰かが許されて、帝都へ帰ってきて、今度は伯爵になった。そういうことだって」

クレメンツ大公の陰謀発覚時、連座したその側近と廷臣はリヒャルト皇太子の際のその三倍近い一七〇名に及ぶ。クロプシュトゥック侯は宮廷での地位を逐われるのみで、処刑を免れ爵位も保持した。彼がクレメンツ大公の支持者であり、当時のフリードリヒ大公へ露骨なまでの蔑視を露わにしていたことは事実にしても、陰謀を共有するほどに近い側近とは見做されなかった故である。

しかし、そのクロプシュトゥック侯ですらその後、ブラウンシュヴァイク侯爵邸爆破事件を起こすまでの三〇有余年、完全に宮廷から排除されるほどに、フリードリヒ四世とその側近の憎悪を買っていたのである。リヒャルト皇太子とヴァルハラへの行を共にした、当時のシュトレーメル家当主が、現皇帝はともかくその側近……すなわちブラウンシュヴァイク公でありリッテンハイム侯、あるいはリヒテンラーデ侯らからどう見られていたかは想像に難くない。

「つまり……」

しかつめらしく、形の良い眉をしかめてラインハルトは言った。「無罪だと分かったけれども、侯爵には戻してやらない。お情けで伯爵にはしてやるが、昔みたいに威張りくされなくなるように財産や地位も全部は返してやらないし、宮廷にだつて入れないようにしてやる——そういうことか」

「ラインハルト……」

身も蓋もないラインハルトに、キルヒアイスは苦笑しながらもその概括がおおよその事実であることを認めた。事実、シュトレー

メル星系はその名を変えられて、別の貴族の所領になっている。周辺宙域の鉱山や航路の権利が伯爵家に残されているわけもなかった。

「だから、『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』の取り巻きには入らないのか」

シュトレーメル伯爵家の次期当主としてのフロリアン・ゲールハルトから見れば、彼らはシュトレーメル伯爵家を現在の苦境に追い落とした連中の片割れである。おいそれとその配下に付こうとは思わないだろうし、一方のコンラディンたちも彼の素性を知っていれば、取り巻きに加えようとは思わないというのも納得のできるところである。

一通りの調査結果報告が終わると、ラインハルトたちには決断を下すべきことがあった。フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレーメルを彼らの味方にすべきか否かである。彼らが他の一〇歳児たちと決定的に異なるのは、彼らができるだけ早い内に味方と敵を見極める必要に迫られている、未来の叛逆者であることだった。しばらく考え込んでから、やがてラインハルトはその金髪を左右に揺らした。

「向こうはあんまりこつちと仲良くはなりたくなさそうだからな。」

『ヴァルテンブルグ伯の姪孫殿』と連むとも思えないし、しばらくは今のままで良さ。どう思う、キルヒアイス？」

「僕もそう思う。プライド高そうだしね」

頷きながら、キルヒアイスは敢えて口にしなかった情報を咽喉の奥に飲み込んだ。聞かせてもラインハルトの判断にプラスになる

とは思えなかったし、むしろ、その感情を逆撫でするかも知れなかったからだ。

一つはシュトレーメル伯爵家の現当主の名前。今ひとつは、フロリアン・ゲールハルトの兄弟姉妹のことだ。現当主の名はセバステイアン。偶然にもラインハルトの父と同じ名であり、しかも、トゥルナイゼンの言葉を借りるなら、『優柔不断で、無気力な人らしい』父への連想から、ラインハルトがシュトレーメル伯爵家への反感を刺激されるかも知れない。キルヒアイスはその点を案じたのだ。

今ひとつ、フロリアン・ゲールハルトには一歳違いの姉がおり、当主のセバステイアン・フォン・シュトレーメルは彼女を権門に嫁がせることで伯爵家の地位回復を図ろうとしているらしいとの噂だった。そして、その『権門』がこともあろうにヴェインステンゲン侯爵の甥の一族、すなわち、コンラディン少年がフロリアン・ゲールハルトの義兄に擬されているということなのだ。

それにしても彼らよりも一歳年上と言うことは、フロリアン・ゲールハルトの姉はまだ二歳でしかない少女である。ラインハルトに父と姉のことを思い起こさせ、感情的な反発を招くに十分な情報だった。ラインハルトのことである。どうして父親を殴つても、そんな婚姻を止めさせないのか、とフロリアン・ゲールハルトに詰め寄りがねないではないか。

そして、キルヒアイスにも分かったのだ。フロリアン・ゲールハルトは決してラインハルトの味方にはならないだろうことが。同時に、成績上位のグループに入っている平民たちが、どちらかと言えばラインハルトを敵視している、その理由についても。

フロリアン・ゲールハルトが懸命に幼年学校での優等生たろう

としている理由。それは、帝国での、ひいては新無憂宮<sup>（インペリヤンズ）</sup>でのシュトレーム伯爵家の地位を回復するためだ。幼年学校での成績を足がかりに士官学校、さらに士官の道を歩み、優秀な士官として、やがては軍事官僚として認められていく。自らの力だけを頼りに、再び伯爵家の栄光を取り戻す。

一方、平民出身の多くの生徒たちも思いは同じだろう。違うのは、彼らには榮譽に包まれるべき『家』はなく、個人のみで榮達こそがすべてに違いない。

そんな彼らから見れば、一般教養から軍事に至るまで天才的な才能の閃きを隠そうともしないラインハルトは最大の競争相手。榮進への階梯において蹴落とすべき敵手でありこそすれ、決して行を共にすべき友人でもなければ、志を同じくする仲間でもない。

ただ単に『平民出身者』であるというだけで、安易に心を許すのは好ましいことではない。彼らもまた、門閥貴族同様に、あるいはそれ以上に危険なラインハルトの敵に回りかねない。一〇歳の少年とは思えぬ想いを、この時キルヒアイスは胸の奥に畳み込んだ。

「なんだ、キルヒアイス、ため息なんかついて」

「え——？」

「ため息一つ付くごとに、歳を一つ取るって言うからな。そんなじゃ、すぐにジジイになってしまっぞ」

「歳じゃないよ、幸せが抜けていくって言うんだよ」

誰に聞いたんだか、と思うと同時に、キルヒアイスは思うのだ。誰のせいでこんなにため息をつく羽目になっていると、ラインハルトは分かっているのだろうか。もつとも、その道を選んだのが自分であり、ため息をつくのもそれゆえだということをキルヒアイスは

知りすぎるほどに知ってはいるのだが。

彼の問いに、ラインハルトは胸を張って答えたが、それはキルヒアイスの予想をいささかも外してはいなかった。

「姉上だ。姉上が昔、そう話してくれたんだ。だから、俺は一日に一回はため息をつくことにしてる」

違うだろう、アンネローゼがそんな話をするはずはない。アンネローゼは『幸せが抜けていく』と話したに違はなく、それがラインハルトの記憶の中で微妙に変形して定着してしまったに違いない——が、なぜわざわざため息をつくのさ？

「なぜ……？」

自信満々にラインハルトは答えた。

「早く歳をとれるじゃないか！」

キルヒアイスは脱力した。確かにラインハルトと歩みを共にするのは、その分、同年代の少年達よりも遥かに早く年齢を……肉体的ではなくて精神的に……重ねていくということを意味するのかも知れない。

キルヒアイスの予感通り、フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレームとラインハルトとの距離がそれ以上に縮まることは、幼年学校の五年間を通じて遂になかった。

帝国暦四八二年六月、ラインハルトとキルヒアイスは惑星カプチュランカでの初陣に向けて帝都を離れる。ラインハルトに倣って何人かが幼年学校から直接戦場への道を選び取る一方で、成績優秀

者としての徳憑を受けたフロリアン・ゲールハルトは、帝国軍士官学校の生徒となった。

フロリアン・ゲールハルトの才質を惜しむ気分が皆無ではなかったらしいラインハルトだったが、キルヒアイスはシュトレームル伯爵家の次期当主への接近を敢えて勧めなかった。

「フロリアン・ゲールハルトが僕たちの仲間になるとしても、時間が必要です。今は、未だ無理だと思えます」

静かな表情に、しかし確乎たる意思を示して断言する赤毛の少年に、ラインハルトもさすがに反論の言葉を見いだせなかった。

「時間か——？」

「時間が経って、彼が僕たちと一緒に رفتてくれるようになったら、きっと彼は僕たちの前に現れる……と言うか、きっと会う機会ができると思えます。そうでなかったら、もう会う機会はないでしょうね」

「おかしなことを言うな、キルヒアイス。いつから運命主義者になったんだ？」

少し茶々を入れるような言葉を弄したもののラインハルトはキルヒアイスの言葉を受け入れる。彼らは未だ一五歳であり、まずは自らの武勲によってその地歩を確保せねばならない立場にあった。彼らの究極の目的……ゴールデンバウム王朝を打倒し、姉アンネローゼを宮廷という名の牢獄から救い出す……を共有すべき同志を見出すのは、その長い行程でのマイルストーンであり、最初の一步を踏み出すための前提ではあり得なかったのだ。